京都・長岡京跡（ながおかきょう）

1　所在地　京都府長岡京市神足四丁目

2　調査期間　右京第七一三次　二〇〇一年（平13）八月～九月

3　発掘機関　㈶長岡京市埋蔵文化財センター

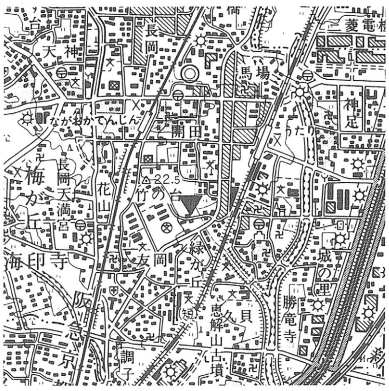
4　調査担当者　岩崎　誠

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　長岡京期（七八四年～七九四年）

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は右京七条二坊七町に位置し、南は七条条間小路に面する。調査区は東西約四ｍ南北約三三ｍ、調査面積は約一三二㎡。検出遺構は掘立柱建物・素掘溝・石組護岸溝などがある。



（京都西南部）

掘立柱建物は、屋内に甕据付け穴と思われる土坑が並び、醸造関連施設と考えられる。掘立柱建物柱穴から、長岡京期の土器類とともに「石上朝／石上朝」と書かれた紡錘車状墨書土製品（土師器食膳形態底部の再加工土製品）が出土した。

石組護岸溝ＳＤ一二は、北側のみ石組で護岸しており、北側の立地条件の悪さによると考えられる。一部、南への張り出しがあり、張り出し南端部には杭列による区画や堰が設けられていた。張り出し南端部の杭列によるＬ字型区画の区画内には礫が敷き詰められ、洗い場と考えられる。なお、南肩部分の杭列には小枝が絡ませてあり、しがらみ構造になっていた。溝最上層からは、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器などが出土し、平安時代に完全に埋没したと考えられる。

木簡はすべてＳＤ一二のしがらみ付近から出土した。他に、黒色土器を含む各種土器類、人形・糸巻など木製品、長岡宮・京内で二例目となる平城宮六三一三Ｄ型式の軒丸瓦などが出土し、「入」「東」「上」と書かれた墨書土器も出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「用銭四百七十三文　榑十六村　直銭」　(244)×19×4　019

(2)　「□□令令令□□」　(155)×(6)×(16)　081

(3)　「〈久米〔郷カ米カ〕□白□」　(75)×20×4　039

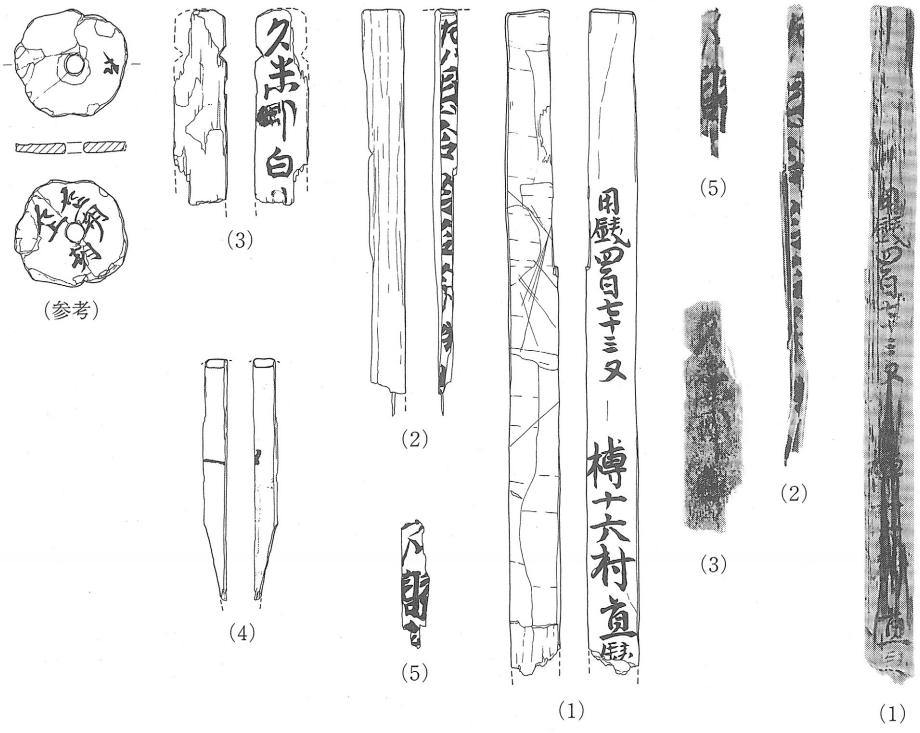
(4)　「□□□」　(92)×(9)×4　081

(5)　「□□□

(1)は板目材で、上端は切り折り。榑十六村を購入する直銭を記している。「榑」と記した木簡は平城宮第三九次調査や、長岡京左京第二〇三次調査でも出土している（本誌第一二号）。(2)は分厚い板目材を柾目取り板に小分けにされたものか。習書簡と考えられるが、呪符の可能性もある。(3)は板目材の荷札木簡で、品目は白米か。「久米」は郡とすると美作・伯耆・伊予、郷とすると大和国高市郡・伊勢国員弁郡・遠江国磐田郡が知られる。(4)は上端は表裏両面から削って切断している。縦に半裁されている。墨痕が看取できるにとどまり、判読できなかった。(5)は板目の面を持つ削屑。

なお、釈読にあたっては京都産業大学の井上満郎氏、向日市の清水みき氏・国下多美樹氏・中島信親氏ほかのご教示を得た。

（岩崎　誠）



(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(参考)